

西洋に響く能—移行・翻訳・解釈—

はじめに一複数の声を聴く—

ロール・シュワルツ＝アレナレス*

2006年より毎回企画に携わってきた国際日本学シンポジウムの様々なセッションで、特にヨーロッパにおける日本美術コレクションの歴史や、西洋における『源氏物語』の需要がテーマとなった際、能の文化や歴史がしばしば話題となった。こうした過去のセッションとそれに基づく考察をふまえ、今回のセッションでは、流派による伝統の違いを超えて、西洋における日本文化の懸け橋として機能した能の歴史、そしてとりわけその生命力と潜在的な可能性を、舞台上の実践と、これに関する研究という2つの側面から考察した。

この能という芸術について、本セッションでは音楽、演劇、文学、宗教というあらゆる面からのアプローチが試みられたが、能は19世紀末より、まさにその多様で複雑に入り組んだ表現によって西洋を魅了し続けており、能のもつ文学的、精神的力強さには、研究者のみならず、作家や芸術家からも大きな関心を寄せてきた。実際、茶の湯と同様に、能は、その長い歴史や、なにより能にまつわる知識、芸術、文学、思想の多様性から、日本に深く魅了されてきたすべての人々にとって、常に日本文化への扉、そしてその象徴となってきた。また、ジャポニズムの流行や、あるいは個人的な出会いや関わりから生まれた発見を通して、能は多くのクリエイターたちの演劇、芸術、文学へのインスピレーションに深く影響を及ぼした。ポール・クローデル、ウィリアム・バトラー・イェイツ、エズラ・パウンドといった作家、詩人や、アーネ

スト・フェノロサ、バジル・ホール・チェンバレン、アーサー・ウェイリー、フランシス・ブリンクリー、ノエル・ペリ、ルネ・シフェールといった優れた学者が関与する能の受容背景や、能にまつわる様々な作品は、西野氏の研究でも明らかのように、数十年前から日本のみならず西洋においても見られるようになった、能に関する多様な出版物や翻訳、演劇や講演会といった催し物によって、すでに比較的よく知られるようになってきている¹。

海外における日本学の発展、ジャポニズム研究の功績、外国人の日本での長期滞在を可能にする国際文化交流の強化、そして欧米諸国での日本への関心の高まりによって、能が海外進出し成功を収めた今日、過去と未来を繋ぐ、斬新かつ批判的な視点からの実践、翻訳、研究の構築が求められてきている。

1954年にヴェネツィアで行われたビエンナーレ国際音楽祭での、能の初めての海外公演²以降、主に喜多流と観世流の合同能楽団の主導で、日本から招かれた日本人の能楽師による数々の催し物が企画されてきたが、外国人による能、とりわけ日本の国外に居住する外国人による能の上演は、比較的新しい現象である³。

こうした中で、歌舞伎やパフォーマンスアートといった他の日本の舞台芸術を考える際にも注目される、西洋の影響という広い視野を持って、国境を越え異文化に「順応」してきた能の発展についても考察を進めることは、大変興味深いことと思われる。こうした芸術の交流を支

*お茶の水女子大学大学院准教授

える文化的、学術的背景を浮き彫りにするこのような比較文化的なヴィジョンは、2009年ヴェネツィアのカフォスカリ大学と共同で、ドイツのトリアー大学で行われたシンポジウム、次いで2011年にシュルツ・チョンカ氏とアンドレアス・レーゲンスベルガー氏の監修で出版された共著、*Japanese Theatre Transcultural—German and Italian interwinings*（越境する日本演劇：ドイツ、イタリアにみられる相互交流の展開）に見受けられる。ここで以下に、その序章の冒頭部分を引用する。

近年、国際的な文脈における日本の演劇に多くの学術的関心が寄せられている。2009年の秋のみを見ても、ヴェネツィア、パリ、トリアーというヨーロッパの3つの都市で、トランスカルチュラルな演劇の交流をテーマとする研究会が開催された。このような関心の高まりの背景には、グローバルな演劇業界において日本の作品が存在感を増していることや、間文化理論の学術的進展がある。従って、例えばアジアの、とりわけ日本の存在を考慮に入れずして、現代のシェークスピアやギリシャ悲劇の舞台の全体像を理解することは不可能となりつつある。また、間文化的な活動を扱う研究者は、異国趣味や本質主義的なものの見方への注意を喚起し、そこに内包される交渉の過程をより敏感に意識するようになっている。日本演劇のグローバル化の歴史は、これまで様々な視点から記されてきたが、その複雑なプロセスは、未だに十分な位置付けを得ることなく、むしろそれについて言及することさえ躊躇われたまま、今日に至っている。日本を含めた演劇の歴史記述においては、矛盾を孕んだ間文化交流のダイナミクスとその舞台芸術への影響がしばしば等閑視される。バルチャは演劇の翻訳プロセスを「異なる演劇文化の間だけでなく、そうし

た文化の間の差異の内側で、様々な観点から絶えず分断され、反転され、問題視されるもの」と指摘する*。しかし、やや緩慢な日本演劇の近代化／グローバル化は、このような翻訳のプロセスとして十分に理解されているとは言い難い状況なのである⁴。

この論文集には、自らの経験を基に、非-日本人の能楽師として能の稽古と実践の条件と課題の分析を試みた執筆者が含まれる。その一人、イタリア人研究者ディエゴ・ペレッキア氏のケースは、こうした新しい傾向をとりわけ顕著に表しているといえよう。ここでもう一つ、*The International Noh Institute of Milan (INM): transmission of Ethics and Ethics of Transmission in a Transnational Context*（「ミラノ国際能楽研究所：国家の枠組みを越えたコンテキストにおける行動規範の伝播とその倫理」）と題されたペレッキア氏の論文の一部を以下に紹介したい。

能をひとつの行動規範として受容する際には、オリエンタリズムの枠組みの中での関心のあり方としての、形式的美学的側面への傾倒からも、またその異質な道徳観に対する関心からも、距離をとるべきである。さもなければ、伝統と向き合い行動規範の違いが明確に認識されることによって、自己の再-規定のプロセス—「自己」と「他者」の軋轢からその意味は引き出される一ばかりが強調されてしまう。レヴィナスは「貪欲な行為を思い起こす」アプロプリエーションとして、他者性へのアプローチに関心を寄せている*。これを能研究に応用するならば、インターナショナルな学生は、「この伝統から何を学ぶことができるのか」ではなく、「行動規範に基礎をおいた伝統との関係性をどのように築くことができるのか」と自らに問いかけることになるだろう。また同様に、個々人に潜在

的可能性を認める〈道〉の哲学—これによって「能」という言葉が語源的に孕む可能性という意味合いが明らかになる**—においては、学びの過程で面する「自己」と「他者」の多様性とその都度再交渉する能力こそが才能として理解される。デコッカーが〈道〉の哲学の精神的な成長過程に呼応させて「精神的な探求」と呼ぶ特質は、必ずしもその行程が孤独の中で行われなければならないことを意味しているのではない***。本質的に演技が社会的な活動であるのなら、稽古を通して能を学ぶということは、その稽古が行われるコミュニティ、さらにより広い集団の中で、自己を再評価することを意味する。従って、こうした経験が目指すのは、異文化のアプリケーションでも、自己否定を伴う伝統への絶対的な従属でもあってはならない。自己と能の間の、文化的実存的隔たりは、橋渡しされるべきものではなく、むしろ育まれるべきものなのである。INMのインターナショナルな学生たちが能を学ぶあり方の多様性は、トランス-カルチュラルなトレーニングの可能性を認識し、さらにそれを理解するための重要な拠り所である。また、能が日本の遺産の一部であるだけでなく、生きた伝統であり、外国人がコロケーションを見出そうと模索する歴史の新たな側面にそれがゆっくりと差しかかりつつあるということを、彼らの多様な取り組みの姿勢は裏付けるのである。従って、伝統的な教授法を重視することは、硬直した保守主義を象徴するのではなく、能の美学に通底する行動規範の価値を意識していることの表れであり、これは表層的な異国趣味を克服し、その美、すなわちその良さをより深く理解するための鍵となるのである⁵。

歴史や伝統とは不可分でありながら、異なる分野や文化の眼差し、試みを受けてきた能の研究にお

いては、今引用した論文に強調されるように、師匠から弟子へ、ある国から他の国へといった伝承の問題、倫理的、社会的、あるいは美学的な観点からの解釈のあり方、そしてある特殊な歴史・社会・文化背景への能の深い関わりが、いかにしてその普遍性と人間性に昇華されるのかといった問題が、国際的な受容に伴い、かつてないほど問われてきている。今日、日本国外で発展を続ける能文化は、時としてより自由な「外部」からの眼差し、そして「他者」の、すなわち日本とは異なる思想、状況、個人・集団のアイデンティティーに従いながら、実践から理論に至るまで、新しい体系的な問題を提起し、場合によって伝統の捉え方と伝え方を革新さえするものとなるのである。

西洋における能の活発な受容が直面するこうした現代の挑戦や問題、そして能が国境を越えて行き来することで生じ得る革新や刺激作用、そして当然リスクや障害について、本セッションでは6人のスペシャリストの方々との考察や活動、研究を通して考察した。発表して下さったのは、研究者、アーティスト、能楽師、芸術監督といった方々で、長年積み上げてこられた研究や、他者に開かれた情熱は、才能を開花させ、刺激的で意義深い研究の展望を切り開くことに大きく貢献している。

各論に入る前に、19世紀末以降、能について語られたいくつかの言葉を通して、本セッションの核となる主な方向性をより明確にし、翻訳、文学、音楽、あるいは実践や表現方法といった、今回のテーマにもある現代の能の歩みと作品の意義と重要性を、能の国際的受容にとって重要な時期を中心に、歴史的観点から捉えてみたいと思う。

本セッションのテーマにもある北米の研究者、アーティストの方々との研究と能の実践、そして能楽作品の英訳という問題に呼応して、ここでは西洋における日本文化の伝承者、ガストン・ミジョン、ノエル・ベリ、ルネ・シフェールという、それぞれ異なる状況や目的をもった3人のフランス人の声に耳を傾けてみたい。彼らは、本セッション

ンにおいて取り上げられたいくつかの研究や問題の先駆者ともなった人物である。

ガストン・ミジョンとジャポニズム時代の能楽コレクション

西洋絵画を学ぶため19世紀後半パリに渡った、黒田清輝や久米桂一郎といった若き芸術家らにとって重要な存在であったフランス人画家ラファエル・コランに、十数年前から捧げられてきた研究によって、コランが日本に対して抱いていた関心が明らかになり、彼の日本美術コレクションが見直されることとなった⁶。このことについて、コランの近い友人の一人が次のように証言している。

日本美術が彼の周囲を覆い、彼の中に浸透し、彼の周りに独特の空気を生み出していた。視線は、彼が夢を描きだすキャンバスから時折離れ、日本の陶器や漆器の名品が並ぶガラスケースに休息しにきた。彼の目は、これらの品々の魂に満たされたいと願っているかのように、この心惑わず魅惑的な世界を熱心に眺めていた。この画家の頭は、常にそこにあるこの美しさに酔いしれ、繊細で力強い香気を心ゆくまで吸い込んでいた。画家は、パレットを一旦置き、表情豊かな美しい能面、屏風、仏教の掛物、そして、書棚の上から宝物たちを見守っているかのような、彼が大切にしている蓮の花を頂く獅子の彫像を眺めた。この獅子の複製は、ガストン・ミジョンの書いた『日本美術の傑作 *les Chefs-d'œuvre d'art japonais*』(D.A Longuet, Paris, 1905; フランスの美術館や当時の主要な日本美術愛好家の個人コレクションの目録)に見ることができる⁷。

この文章が描き出しているように、西洋にける能

文化との出会いのひとつが、19世紀後半のヨーロッパ、とくにフランスで巻き起こったジャポニズムの流行と関係していることは明らかである。すなわち、江戸時代の浮世絵や漆器、陶芸品と同様に、能面だけでなく装束も、美術品として、多くの場合美術商の林忠正⁸の仲介と率先的な取り組みを通して、日本美術愛好家を魅了したのであった。

明治時代の日仏交流史におけるテキスタイルをテーマとした3年前のシンポジウムでは、ギメ美術館学芸員のオーレリー・サミュエル氏が、日本の衣装が、漆器や陶芸品、あるいは浮世絵と同様に、日本美術愛好家の間で関心の対象となっていた事実を、新たな研究の可能性として強調された⁹。愛好家たちは、その素材の豊かさ、文様と技術の多様さに魅了され、そこに西洋の工芸品を活性化させ得るインスピレーションの源を感じ取り、衣装を収集し、ジャポニズムが流行するヨーロッパで高く評価されていた、浮世絵に描かれる歌舞伎役者を思わせる豪華な着物、そして能面を身に着けた。著名な日本美術コレクターで、著書『日本美術 *L'Art Japonais*』(1883)で知られるルイ・ゴンズ(1846-1921)を写した一枚の貴重な写真が、こうした熱狂を如実に物語っている。友人の林忠正と妻アンナと共に、チェルヌスキ極東美術館(パリ17区)の創設者、アンリ・チェルヌスキの邸宅での晩餐に招かれた際に撮られた一枚で、三者共日本の衣装を身に着けた姿で写されている。1900年、「日本の能面」に関する論文の中で、ゴンズは、その晩の仮装が受けた賞賛について触れながら、能面と、アンナが身に着けていた着物について記述している¹⁰。この着物は、1924年5月にオテル・ドルオーで行われたゴンズのコレクションの競売カタログに見ることができる¹¹。

チェルヌスキ邸での仮装パーティー、ラファエル・コランのコレクション、あるいはオルセー美術館所蔵の林忠正のマスク¹²が証明しているように、とりわけ能面は、多くのアーティストや日

本美術愛好家を魅了したのであった。

こうした能面のヨーロッパへの渡来、そして能面をめぐる研究について、西野氏は、15年前に一年かけてイギリス、フランス、オランダ、ドイツ、スイス、イタリアの計6か国の様々な美術館で綿密な調査を行い、その結果、能の国際的評価という観点から、その重要性を指摘した。特に2007年に出版されたドイツ文学者吉田次郎氏との共著書の中では、1924年の著書で能面と狂言面の歴史について世界で初めて体系的な研究結果を紹介した、ドイツ人の東洋美術史家フリードリッヒ・ベルツィンスキー(1877-1962?)の先見性が明らかにされた¹³。また、近年出版された『海を渡った富山藩の能面』の中でも、著者の胡桃正則氏は、西野氏の研究を大きく取り上げ、ベルリン美術館とオックスフォードのピット・リヴァース博物館に所蔵される能面の価値、歴史、入手経緯について分析している¹⁴。

フランスでは、ジャポニズムが開花したまさにこの時代、1894年に、ルーヴル美術館はガストン・ミジョンの尽力で、彼が責任者を務める美術工芸品部門の中に初めて日本美術コレクションを導入した¹⁵。同じ年、ラファエル・コランは自身のコレクションの中から能面を1点寄贈し、それは浮世絵や陶芸品、漆器の横に陳列された。そして、この能面を通してルーヴル美術館にもたらされた能の文化は、フランス、広くはヨーロッパにおいて日本美術がそれ以降獲得していった美学的、制度的な認知に、初期の段階から関わっていたのである。能の国際的な受容にとって決定的となったこの局面を取り仕切ったミジョンの言葉を、ここに引用する。

日本人が「進歩」と信じた(明治維新という：訳者注)急激な変動は、彼らを未知の運命へと押し流しているが、そうした中で能は存続できるのだろうか。別のものになってしまうとしたら、永遠に嘆かわしいことであろう。

能は、仏教が深く浸透した日本人の詩学の最も美しい形式の一つであり、これほど繊細な説教の形式をもった宗教は、世界でも類を見ない。古くから絵画と彫刻が寺院や僧院で実践されていたように、能もここで生まれ、おもに仏教儀礼の補足として演じられてきたが、これはエリートにのみ向けられたものであり、一般大衆には解しがたい極めて文学的なものであった。それが、能を我々ヨーロッパ人にはしばしば解りづらくしている要因の一つである。しかし能は今なお奇跡的な造形美であり続けている。所作や足の運びはこの上なく表現豊かで、いわばそこに表される人間の基本的な感情で我々が理解できないものは一つもない。演出や時間・場所の概念が皆無である点で、能はシェークスピアの幻想的な演劇と近いものがある。また、演劇としての力強さ、謡の役割、能面、舞は、不思議とギリシャ悲劇にも通ずるものがある。

日本はこれまで、能のみならず日本の芸術を、西洋の目に触れさせてこなかった。どちらにしても、その研究を志す勇敢な者に、どれほど多くの発見が約束されていることだろう。能に関しては、フランスの批評がこの幸運に与ることを期待したい。現在ハノイの研究所で日本語教師をしているペリ神父は、18年に及ぶ日本滞在で能を堪能した。我々が待ち望む明晰な研究書が、遠からず発表されるだろう¹⁶。

ノエル・ペリ(1865-1922)：能の「仏教的靈氣」

前例のないその翻訳作業と、解釈的な分析の独創性によって、能文化の誕生とその内容を特徴づける歴史的、宗教的コンテクストの重要性を初めて明らかにし、フランスにおける日本学の創始者の一人として、その発展に大きく貢献することになるノエル・ペリの大きな功績は、フランスで

も日本でも早くから認識されてきた¹⁷。彼より3世紀前の信長や秀吉の時代を生きたポルトガル人宣教師、ルイス・フロイスも、ペリと同様、日本滞在中に能の上演に興味を抱き、西洋では能についての貴重な最初の記述を残したが、若きノエル・ペリが1888年、司祭職に就いてわずか数か月した後、海外使節団として来日したのも、やはり宗教的任務のためであった。フロイスの批判的、比較的視点は、能に好意的ではなく、単調で耳障りなものと評し、彼の後で多くの西洋人も同様の評価を下したが、ペリは、明治期という全く異なる時代背景によるものもあるが、口語・古語共に熟知していた日本語の高度な知識を、研究者としての素質と類まれな精神の柔軟性に生かし、能の世界に奥深くに分け入り、その音楽的、宗教的本質をつかんだ。彼の『日本の歌劇に関する研究』の序章において、このことが見事に証明されている部分を以下に引用する。

能はその当時もっとも高尚でまたもっとも完成した形式をもっていた。第十四世紀、第十五世紀にはこの点で能に並ぶものはなかった。能は足利時代の文学の宝であった。同時にわれわれにとっても、もっとも真実でかつ強烈な表現であり、そして能の文学的興味はその歴史的興味によって倍加するのである。能はこの不安な乱世における人々の感情、思想、信仰、迷信、憧憬など、一切の知的、道徳的生活を、もっとも人心をつかむような形でわれわれの眼前に再現させ、その抒情性はさらに力強い感動をわれわれに与えるのである。能はわれわれの眼前に神仏や君主や宗教家、奇跡を行う通力者、武將、女丈夫さては幽霊までも活躍させる。とりわけ能は当時の人心に深く浸透していた仏教の深遠な印象を奇跡的に表示する。すなわち仏教的立場で当時の人々が自然界の森羅万象を見て詠んだ詩歌、諸行無常の観念で飾られた詩歌、それら

が能の中に織り込まれているのである。

いわば能の大部分は仏教的で、また能を活かすのもこの仏教的靈気である¹⁸。

この研究は1909年から1920年の間に、権威あるフランス極東学院の紀要に掲載された。ペリは1907年から1922年にハノイで突然この世を去るまで、この学院のメンバーであった。そしてこの研究は2004年に論文集の形で再版されたが、序文を書いた同じくフランス極東学院所属の研究者、フランソワ・ラショーは、ペリの革新的なヴィジョンと研究に敬意を表しながら、彼の死後、フランスにおける能研究の発展に果たしたその役割と与えた影響について、次のように記述している。

彼のアプローチは、のちに世阿弥の美学が果たした役割を問うルネ・シフェールにはまだ及ばないが、能の包括的な理解を目指し、彼の宗教的直観力によってそこに到達したのだ。のちのベルナル・フランク¹⁹と同様、ノエル・ペリは、学術的な宗教と民間の宗教の対立の無意味さに気付いていたことを付け加えなければならない。神道と仏教の混合主義という現代の理論よりだいぶ前に、また、国家が国の宗教（国家神道）と大陸由来の仏教、熱狂的な日本の土着民と遠くへ追いやられた他者との間の境界を定めることに専心する時代背景の中、ノエル・ペリが呼ぶところの（密教の二つの曼荼羅に関係する）「両部神道」、つまり土着の神々と仏教の神々を、教義上でも儀礼上でも一つに融合しようという神仏習合の思想体系に向けられた関心は、多くの能作品の核心点や、それらの作品が制作された時代に支配的であった精神を理解するうえで重要である。土着の日本文学者の仏教にとってあまり好ましくないこうした状況は、ペリを逆の理論へと導こうとしたが、自らの解釈に賭け続けたのは、ノエル・ペリの

一つの大きな力である。能は抒情詩に由来するものであるが、ペリは能を、不吉な力を鎮静する儀式、人間の存在の連鎖を、死者と生者の共同体を断ち切らないための鎖と位置付けた。(中略)

ノエル・ペリの研究は昔のものではあるが、いまだ本質的で影響力に満ちており、その再評価は新たな熱狂を生み出すだろう。そしてこの比類なき演劇ジャンルに対する、深く丹念な真の知識の上に、そうした新たな研究が築かれていくだろう。そして、ノエル・ペリの人となり才能が、行間から見えてくるだろう。ペリはフランスの能楽研究に新しい道を開き、これがガストン・ルノンドー、ルネ・シフェール、ジェラルド・マルツェルによって例証されていくことになる。ペリはおそらく多くの才能を開花させたが、たとえそれがポール・クローデルだけであったとしても、ペリのお蔭でクローデルの「眼は聴く」ことができたのだ。この死者と生者の音楽、あの世の詩学、舞台空間の宗教的戦慄は、西洋のアーティストや知識人を魅了し続ける日本の記憶の連鎖の一つであり続けている²⁰。

ルネ・シフェール 翻訳から舞台へ：全世界的な能への日本学の寄与

最後に取り上げるのは、上に引用したフランソワ・ラショーの文章の冒頭にも登場したルネ・シフェールで、西洋では能の専門家から愛好家まで、その声は今なお最後の拠り所であり続けている。研究者、翻訳家としての彼の膨大な功績は、2004年に亡くなるまで、フランスをはじめヨーロッパの日本学の進展に寄与し、これを刺激し、導いてきた。4年前にこの国際日本学シンポジウムで源氏物語の受容を取り上げた際にも、シフェールはその代表格の一人であった²¹。シフェールによる世阿弥の能楽論の翻訳 (*ZEAMI*

La Tradition secrète du Nô)²² は、1960年、すなわち1929年に原書を見出してからわずか30年ほどで出版されたが、その前書きには次のように記されている。

世阿弥の理論書における美的概念は、西欧の諸芸術に有益な影響を与える可能性を秘めている。こう言おう。演劇のみならず、諸芸術に影響を与え得るのだと。というのも、この舞台のレオナルド・ダ・ヴィンチは詩人にして音楽家、演出家にして歌手、振付師にして役者なのであり、己の経験から普遍的原理を抽出する術を心得ており、それは演劇においてはもちろんのこと、ことに絵画、彫刻、建築の分野に適用の場を見出すことが可能だろうからだ。まさにこの点において、能の研究は能楽という日本の限られた芸術を超え、普遍的射程を有する典型的価値を帯びることになるのである²³。

能研究の専門家、特に日本学という限定的な学術分野以外ではあまり影響力をもたなかった、ノエル・ペリの先駆的能研究とは反対に、世阿弥の理論書のフランス語による初めての翻訳は、能の美学に光をあて、本書の背表紙に編集者R.エティアンブルが言い表しているように、「普遍的ヒューマニズムの至宝への今世紀最大の貢献の一つ」を読者に提示するものであった。この「東洋の知 *Connaissances de l'orient*」シリーズ (Gallimard-Unesco 刊) の編集者は、続けて「能の観方、聴き方」を教示しながら、本書は読者に「本物の戯曲論の意味」を提示するものだと熱く語り、「おそらくいつの日か、ヨーロッパの戯曲論の復活は、シフェール氏が能の翻訳をフランス人に示した1960年に起こったと書くことになるだろう。ブレヒト？それもいいですが、世阿弥をぜひ！」と締めくくっている。

シフェールの解釈の正確さ、明晰さは、テクス

ト、舞台、役者、装束に及び、彼の翻訳を支えた整然たる理論、方法論によって、過去の誤謬や曖昧さを一掃し、驚くべき多才な世阿弥を日本のレオナルド・ダ・ヴィンチと位置付け、能の美学的文化を人類最大の遺産の列に押し上げた²⁴。

では今日、この古来の芸術をいかに翻訳し、研究し、伝えるのか。その実践と国際的な解釈において、普遍的芸術としての能と、特定の文化、伝統に根付いたこの芸術の間の緊張関係を、いかに解消するのか。本セッションのテーマをめぐって、多くの重要な問題が浮かび上がってくる。ルネ・シフェールの功績と見解は、こうした問いに私たちを誘う。「大概、テーマとは何の関係もないこともある幾つかの舞によって区切られる、伴奏を伴って歌われる長い詩 « long poème chanté et mimé, avec accompagnement orchestral, généralement coupé par une ou plusieurs danses qui peuvent n'avoir aucun rapport avec le sujet » というシフェールによる「能」という言葉の翻訳の試みは、一言では言い表せないある芸術を、西洋の言葉に置き換えることの難しさを表しながら、音楽的、詩的、演劇的な能の潜在的可能性と表現手段の豊かさを強調する。そして、そうした古典的価値と普遍的な力を、シフェールはアイスキュロスとラシーヌになぞらえたのであった。

本論の締めくくりとして、1960年に当時の能楽への関心や期待に応えつつ、本セッションで取り上げられた主な問題点をすでに提示していたシフェールの言葉を、以下に再度引用したい。

謡いや仕舞いを実践したことがなければ、能を『内側から』理解することは外国人にとっては困難ないし不可能である。しかし、謡いや仕舞いを実践することで能の心理的・美的メカニズムの主観的把握が可能になる場合、批評的実践の方はおろそかになるのも否めない。能に関する主観的観点と、外部から出発する客観的な能の吟味の摺りあわせを行う必

要があろう。こうした摺り合わせにあたって、外国人は日本人専門家より有利な立場にあるのかもしれない。それが、おこがましくも映りかねない試みを宜う唯一の理由である。ともあれ、世阿弥の能楽論翻訳は、テキストの検討が、絶えず日本人の専門家が提示する解釈、時に主観的な解釈に支えられるのでなければ成功しない。[…]

能は日本独特最たるもので、日本人でさえ長い修練を経てようやく理解できるようになる芸術である。それになぜ外国人が興味を持つのだろうか？日本に滞在経験があり、日本文化の研究に一生を費やす人が能に惹かれたとしても、能を理解もできないしその価値を知ろうともしない西洋人の心に、どうやってアプローチしようというのだろうか²⁵。

シフェールが50年も前から熱心に取り組んでいたこれらの問題が、日本においても海外においても、能の未来とそのヴァイタリティにとって、かつてこれほどまでの今日性を持ったことはないのではないだろうか。本セッションの発表者である、能のスペシャリストであり能を愛する6名の研究者及びクリエイターの方々それぞれの考察を通し、こうした問いに対する答えを探求していきたい。

謝辞

最後に、「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プログラムの助成を受けて開催される本シンポジウムの組織にご協力くださった方々に、この場を借りて謝意を表したい。まず、ご協賛いただいたエディション・シナプス社の責任者金子貴彦様、パネルディスカッションの司会を快く引き受けて下さった戸谷陽子先生、比較日本学教育研究センター長 古瀬奈津子先生とアカデミック・アシスタントの矢越葉子さん、毎年本シンポジウ

ムのために翻訳の補助をして下さっている梶浦彩子さん、アカデミック・アシスタントの浦川修子さん、内山尚子さんをはじめ、シンポジウムの準備に最善を尽くして下さったセンターの全ての皆様に、心から感謝申し上げます。

註

1 例えば以下のものが挙げられる。

- 『能楽海外公演史要』, 西一祥・松田存共編, 錦正社, 1988
- 『外国人の能楽研究: 21世紀 COE 国際日本学研究叢書 1』, 野上記念法政大学能楽研究所編集, 法政大学国際日本学研究センター, 2005.
- 西野春雄, 「世界の中の能—外国人の能楽発見—」, *Hosei University International Japan Studies*, 1, 2003, pp. 93-118.
- 『能の翻訳—文化の翻訳はいかにして可能か—』, 野上記念法政大学能楽研究所編集, 法政大学国際日本学研究センター, 2007

- 2 Diego Pellecchia, "Leoni che folleggiano fra le peonie in fiore": spettacoli di teatro nō al XIII Festival Internazionale 'Biennale' di Venezia (1954)" in *Prove di Drammaturgia*, 17 (1), 2012, [ページ] (on the first Noh theatre performance in the West in Venice 1954)
- 3 明治時代より、アーネスト・フェノロサやエドワード・モースといった数人の西洋人が、能の実践に没頭したが、日本人の師匠とヨーロッパ人の弟子との密な関係に育まれたこうした外国人による能への参加が本格的に増えたのは、第二次世界大戦後の数年の間のことで、10年ほど前から西洋でも日本でも、独創的な舞台や考察が育まれてきた。
- 4 *Japanese Theatre – Transcultural German and Italian Intertwinings* -Scholz-Cionca, Stanca / Regelsberger, Andreas (eds.), München: Iudicium Verlag, 2011.
 "Much Scholarly attention has recently been given to Japanese theatre in international contexts. To mention just the fall of 2009, three European conferences—in Venice, Paris, and Trier—addressed aspects of transcultural theatre exchange. The interest in sustained by an increased visibility of Japanese productions in the global theatre marketplace, and so by advances in intercultural theory. Thus, for instance, it has become impossible to map contemporary Shakespeare or the staging of Greek tragedies without considering Asian, notably Japanese contributions. Also, the critique of intercultural practice has sharpened the sensitivity

to the negotiations involved, warning against traps of exoticism and essentialization. Histories of the globalizing Japanese theatre have been written from various perspectives, but mapping its intricate processes still shows omissions and areas of taboo. Theatre histories—including those written in Japanese—often fail to account for the contradictory dynamics of intercultural exchange and its impact on the performing arts. The comparatively slow modernization cum globalization of the Japanese theatre is far from being thoroughly understood, as "the translation process is constantly being interrupted, reversed, and questioned from multiple angles, not just between theatre cultures but within the intercultural differences of these cultures"

** Rustom Bharucha, "Foreign Asia/ foreign Shakespeare: dissenting notes on New Asian interculturality, postcoloniality and re-colonialization." Dennis Kennedy and Li Lan Yong, *Shakespeare in Asia: Contemporary Performance*. Cambridge, UK; New York: Cambridge University Press, 2010, p. 278.

(翻訳: 内山尚子 / 翻訳協力: 浦川修子)

- 5 Diego Pellecchia, "The International Noh Institute of Milan: Transmission of Ethics and Ethics of Transmission in a Transnational Context" in *Japanese Theatre – Transcultural German and Italian Intertwinings*, 2011, pp. 47-48
 "I believe that an ethical approach to Noh should depart from both formal aestheticisation and moral radicalism as attitudes comprised within the spectrum of Orientalism; it could instead emphasise the process of continuous renegotiation of the self that takes place in the exposure to a tradition that bears a different ethics, drawing its very meaning from the friction between 'self' and 'other'. Levinas is concerned with the approach to otherness as an act of appropriation that 'refers back to an act of grasping': applying this concern to Noh learning, the question international students would ask themselves is not: 'what can I take from this tradition?' but 'how can I establish an ethical relationship with tradition?' Likewise, the philosophy of michi leads to consider the individual as a being in potentia—thus revealing the etymologic origin of 'Noh'—and its quality could be sought in the capability to renegotiate the multiplicity of 'selves' and 'others' encountered on its way. The characteristic that De Cocker has identified as 'spiritual quest', corresponding to the path of spiritual elevation of the michi philosophy is not necessarily implying that this path has to be trodden in solitude: if performance is, in its essence, a social activity, cultivation through Noh

practice means reassessing the self within the weave of the community in which it is practiced, and beyond. Therefore, the aim of this experience should be neither appropriation of a foreign culture, nor masochistic enslavement to tradition: the cultural and existential gaps between self and Noh should not be bridged, but nurtured. In the case of many international students of the INI, different attitudes to Noh learning are a rich source of inspiration and understanding of the trans-cultural potential of training, and the confirmation that Noh is not simply a part of Japanese heritage, but a live tradition that is slowly entering a new phase of its history in which foreigners are struggling to find a collocation. The emphasis on traditional teaching methods, then, is not the badge of stiff conservatism, but the awareness of the ethical values that underlie the aesthetics of Noh, and the determination to pierce the surface of exoticism, and to offer a richer view of its beauty, that is, of its goodness.”

* Emmanuel Levinas, “Ethics as First Philosophy” in *The Levinas Reader*, ed., Sean Hand. Oxford: Blackwell, 2007.

** 能。可能性：possibility, potential.

*** Gary De Coker, “Seven Characteristics of a Traditional Japanese Approach to Learning” in *Learning in Likely Places: Varieties of Apprenticeship in Japan*, Cambridge; New York: Cambridge University Press, 1998, pp. 68-84.

(翻訳：内山尚子 / 翻訳協力：浦川修子)

- 6 『ラファエル・コラン展』, 三浦篤監修, 福岡市美術館, 1999.
三谷理華, 「あるフランス人画家と日本美術—ラファエル・コランと極東美術コレクション」, 『美術フォーラム 21』, 醍醐書房, 2007, pp. 81-90.
- 7 Marie-Madeleine Valet, *L'influence de l'art japonais sur un artiste français, Raphaël Collin* (フランス人画家、ラファエル・コランへの日本美術の影響), *Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris*, janvier-septembre 1917, pp. 20-21. (翻訳：梶浦彩子)
- 8 『林忠正宛書簡集』, 文化財研究所東京文化財研究所, 国書刊行会, 2001.
- 9 オーレリー・サミュエル (Aurélie Samuel), 「ギメ美術館クリシュナ・リプー・コレクションの日本織物：その研究と保存」(「第 11 回国際日本学シンポジウム：日仏交流の中のテキスタイル—技術 デザイン、コレクション—」2009 年 7 月 5 日), 『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』6 号, 2010, pp. 65-85.
- 10 “In his article on the Japanese masks Gonse retells a party at Henri Cernuschi's home:

«Dans une grande fête costumée donnée par mon ami Le regrette Henri Cernuschi dans son magnifique hôtel de l'avenue Velasquez, j'avais endossé un costume de daimio et dissimulé mon visage sous un masque rieur, chef-d'œuvre de Démé-Jioman. Mon ami Hayashi (Tadamasa) m'accompagnait déguisé en vieux mendiant, au chef ridé, à la mâchoire branlante. L'effet fut irrésistible » (Louis Gonse, « Les masques Japonais », *le Monde Moderne*, déc. 1900, p.752-753)

(“In a great costume party given by my late friend Henri Cernuschi in his magnificent mansion on the Avenue Velasquez, I put on a daimio costume and covered up my face with a smiling mask, a Démé-Jioman masterpiece. My friend Hayashi accompanied me disguised as an old beggar, brow wrinkled, jaw shaking. The effect was irresistible”)

- 11 On one of the photographs, his wife, to his right, wears a crème satin gown adorned with a treillage en or atténué (a grid of altered gold), decorated with multicoloured embroidery of paulownias flowers (Catalogue de vente de la collection L. Gonse, 5-11 mai 1924, Paris, Hôtel Drouot) [10]?. In the Louis Gonse auction catalogue, a sale held at Hôtel Drouot from 5 to 11 May 1924, the famous satin crème dress appears as number 955.
- 12 ヨーロッパにおける日本文化の最も著名な橋渡し役であった林のために、西洋で当時日本の彫刻の傑作のようにみなされていた能面にインスピレーションを求めて、フランス人彫刻家でドガの友人でもあったアルベール・バルトロメが制作したマスクで、ジャポニズム流行時のヨーロッパにおいて能面が受け入れられた歴史背景を代弁する存在といえる。
- 13 フリードリヒ・ペルツィンスキー, 『日本の仮面 能と狂言』, 吉田次郎訳, 野上記念法政大学能楽研究所監修, 2007.
- 14 胡桃正則, 『海を渡った富山藩の能面』, 桂書房, 2010.
- 15 ローレル・シュワルツ＝アレナレス, 「ガストン・ミジョン (1861-1930) ルーブル美術館極東美術コレクション 初代芸芸員—日本滞在百周年にあたりその業績を振り返る—」, 『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』3 号, 2007, pp.135-149.
- 16 Gaston Migeon. *Au Japon -pèlerinage aux sanctuaires de l'art* (『日本にて—美術の聖域への巡礼』) Chap.VIII : Théâtres -spectacles, Hachette, 1908, pp. 115-116 (翻訳：梶浦彩子).
ヨーロッパに渡った能面が、まず美術品としてコレクターらに好まれたジャポニズム流行の時代の 1906 年、日本滞在の際にミジョンによって執筆されたこの文章

- は、能の文化を歴史的、文学的、宗教的コンテクストの中に捉え直そうとしながら、厳密で斬新な研究によって西洋における能の紹介者として功績を遺したノエル・ペリへの期待に言及している点で興味深い。
- 17 富田 信一, 「ノエル・ペリと明治時代の能」, *Shukutoku University bulletin* 2, 1968, pp. 73-86.
- 18 ノエル・ペリー, 『能』, 井畔武明訳, 桜楓社, 1975.
- 19 ベルナル・フランク: 1927年パリ生まれ。パリ大学法学部卒業、国立東洋語学校・ソルボンヌ大学文学部において日本語・中国語・サンスクリットを学ぶ。国立科学研究センター研究員、国立高等研究院教授、パリ第7大学教授を経て、1979年よりコレージュ・ド・フランスの初代日本学講座の教授。1972-74年日仏会館フランス学長を務める。1996年逝去。フランス学士院会員、日本学士院客員会員
- ベルナル・フランク, 仏蘭久淳子訳; 『「お札」にみる日本仏教』, 藤原書店, 2006 / 『日本仏教曼荼羅』, 藤原書店, 2002 / 『風流と鬼: 平安の光と闇』, 平凡社, 1998.
- ベルナル・フランク, 斎藤広信訳, 『方忌みと方違え: 平安時代の方角禁忌に関する研究』, 岩波書店, 1989.
- 20 *Le théâtre Nô - Etudes sur le drame lyrique japonais. Recueil d'articles parus dans le Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient entre 1909 et 1920* (能 — 日本の抒情劇についての研究: 1909年から1920年にかけてフランス極東学院紀要に掲載された論文集) Reimpression, Paris, 2004, p. 11 (翻訳: 梶浦彩子).
- 21 「源氏物語の千年—日本と欧米における源氏絵の旅—」(第10回国際日本学シンポジウム; 2008年7月6日), 『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』5号, 2009.
- 22 *Zeami. La Tradition secrète du Nô*, Connaissance de l'Orient, traduction et introduction de René Sieffert, Paris: Gallimard, 1960.
- 23 安永愛, 「ルネ・シフェールの能楽論翻訳をめぐって: 鏡の中の芸道論」, 『翻訳の文化 / 文化の翻訳』6, 静岡大学人文学部翻訳文化研究会, 2011, p.10.
- 24 シフェールのこの翻訳書は、日本学の域を大きく超え、当時の前衛劇にまで衝撃を与え、ジャン・ヴィラールやジャン＝ルイ・バローといった役者、演出家に大きな影響を及ぼした (Barrault, Jean-Louis, « Le Nô », *Cahiers Renaud-Barrault*, n° 31, novembre 1960, pp. 37-50 を参照)
- 25 安永愛, 前掲書, pp. 5-6.